

# ラホヤ村通信

(5)

高垣愉佳

## 1. ESL

少し前に、日清カップヌードルの CM で、明治初期辺りの武士が刀を振り上げて、「英検 3 級なめんなー！」と叫びながら、大砲を持った白人兵士に突撃していくという自虐ネタの CM があった。確か CM のタイトルは『survive』だったと思う。私の英語はまさにあんな感じで、しかも私は CM の武士より下の英検 4 級しか持っていない。中学の時に受けたきりだ。そして、これまで英語圏の国には海外旅行で行った事すらなかった。英語が苦手ゆえに大嫌いだったので、英語圏をずっと避けて来たのだった。渡米する事にも気が進まないまま渡米した。当然、渡米前に英会話教室に通おうなどという気すら無かった。そんな状態で渡米したのだから、しばらくはまさに毎日がサバイバルだった。

不動産屋さんのエレーナが「ゆかは ESL (English as second language=第二言語としての英語=英語学校) に行くといいわ。大学で無料のクラスがあるらしいわよ。中国人達は皆そこに通って英語を勉強したっていった。」とアドバイスをくれた。生活に必要な物が一通り揃って生活が落ち着くと、早速私は家から一番近いカリフォルニア大学のオフィスに話を聞きに行った。

ところが、カリフォルニア大学には無料

の ESL クラスは無かった。パンフレットを見ながら説明を受けたのだが、無料どころか、あまりの学費の高さに思わず私はのけぞってしまった。何と 1 か月 1700 ドル、1 ドル 100 円で計算して 17 万円もするのだった。「私の英語力でスタートして、ある程度流暢に話せるようになるにはどのくらい通う必要がありますか？」と尋ねたところ、「三か月くらいは通う必要があると思う。」という返答が返って来た。3 か月ということは、51 万円。無理だ。がっくりと肩を落として、とぼとぼと家に戻った。

でも、エレーナは、中国人達は大学の無料の ESL で英語を学んだと言っていた。ということは、この大学以外の大学にそれがあるはずなのだ。そう思って、それからしばらくインターナショナル・センターで中国人に出会う度に「その英語はどこで習ったの？」という質問を繰り返した。多くの人は「中国の大学で習った。」と言っていて、中には「教会で習っている。」という人も居た。何でも教会はバプテスト派のキリスト教教会なのだが、中国人専用の教会で、週に 2 回、聖書をテキストにして中国語と英語を教えるクラスがあるらしい。中国人専用の教会だが、中国語が話せるあなたは参加出来るから、一緒に行かないか？と誘ってくれた。ミッションスクールで育った私

は聖書は学校でさんざん読まされてもうこりごりだし、信仰心も無いので、丁寧にお断りした。

留学しに来たわけでもないし、英語が好きなわけでもないし、全く通じなくて困っているわけでもないから、まあいいかなあ。と思い始めた頃に、大学の無料 ESLに通っているという中国人に出会った。インターナショナル・センターのリサイクルショップでボランティアの店員をしているリーさんという人だった。

彼女に聞いた大学の名前を検索して調べた。サンディエゴ生涯教育 (San Diego Continuing Education) の一環として、郡内の 8 か所の大学に場所を置いて行われているらしかった。リーさんが行っている大学よりも、別の大学の方が家から近いということが分かったので、早速家から一番近い(と言ってもバスで 40 分程かかるのだが)ミラマーカレッジという所に話を聞きに行くことにした。

ミラマーカレッジの事務所に行って、無料の ESLに参加したいのだが、と告げると早速申し込み用紙を渡された。住所、名前、国籍、身分、これまでの英語学習歴等の質問項目があった。身分の回答欄には“亡命者”“難民”などの項目があり、アメリカらしいなと思った。

申込用紙を提出すると、奥の部屋の机に座るように言われ、テスト用紙と鉛筆を渡された。英語のテストが大嫌いな私は、テスト用紙に触れるのも恐ろしくて、しばらく固まってしまった。そんな私を見て、オフィスのお姉さんは、「このテストはクラス分けの為に必要なの。あなたに一番合ったクラスを見つけるためのテストだから、良

い点数を取らなくてもいいの。ベストを尽くしてくれたら、それでいいのよ。」と励ましてくれた。

オフィスのお姉さんが優しくかったので、何とか最後までテストをやり終えた。中学の教科書程度の英文の音読、長文を読んで 4 択でマークするテスト、絵を見て状況を口頭で説明するテスト、絵を見てそれが過去の物語だと想定してお話を書くテストの 4 種類のテストを受けた。

テストの結果、「レベル 4」との判定をもらった。が、あいにくレベル 4 のクラスは満席なので待機リストに登録する。空きが出たら電話で連絡するから待っているように言われた。通常なら 2~3 週間で空きが出ると思うとのことだった。

しかし、1 か月以上経っても連絡は来なかった。どうなっているのか?と再度問い合わせたが、空きが出たら電話をするから待つようにと言われるばかりだった。そんな時に、別の中国人と出会って話す機会があった。その人の奥さんもレベル 4 でメサカレッジと言う別の大学に通っていて、そのカレッジでは現在空きがあるから、ユカもメサカレッジに行ってはどうか?と教えてくれた。

英語を話すのが苦手な私は、ミラマーカレッジが空くまでメサカレッジに席を置きたい旨の手紙を書いて持って行った。結果的に再度別のレベルチェックテストを受ける事になり、レベル判定が終わるとそのままレベル 6 のクラスに連れて行かれた。

サンディエゴ生涯学習のホームページを隅から隅までしっかり読んで申し込んだわけでも無く、事務所でも詳細な説明があるわけでもなく、あれよあれよといううちに

テストを受けてクラスへ送り込まれたので、ずっと後になるまで知らなかったのだが、この ESL は“移民”の為のクラスだった。

この継続教育制度は州によって制度が異なるらしいのだが、サンディエゴ継続教育のホームページに書かれている内容（カリフォルニア州の制度）を箇条書きでお伝えしたい。

- ・ 8つのキャンパスで開講。
- ・ 一般英語は初級から上級まで7レベル。
- ・ 午前、午後、夜に開講。
- ・ 一般英語以外に、無料のコンピュータークラス、特別クラス、大学進学クラス、就労支援クラス、市民権クラスも開講。
- ・ 18才以上でカリフォルニア州の住人であること。
- ・ 18歳未満でも高卒、既婚、軍関連でカリフォルニア州の住民であれば受講可能。
- ・ USCIS（合衆国市民移民サービス）によって、学生ビザ、商用ビザ、観光ビザ、及び越境カードの人は継続教育クラスの受講は禁止されている。

予算はアメリカ政府から出ているらしい。学生は毎 Semester 毎にカリフォルニア州が実施する CASAS テストというものを受けなければいけない。リーディングとヒアリングから成る、TOEIC に似た形式の、しかしテストに使われるトピックスは経済だけではなく幅広い内容のテストだ。このテストのスコアが前回と比較して上がっているとその学校に予算が下りるが、スコアが前回よりも下がっていると予算が削られる仕組みらしい。だからかどうかは知らないが、無料のクラスとは思えないくらいにいい先生が多く、授業内容もしっかりしていた。

アジア人のクラスメートに「今はアメリカに居るし、母国に帰るつもりはないけれど、やっぱりアジアが慣れているし安心だ。将来の移民先として日本も検討しているのだが、日本にもアメリカと同じように無料で日本語を学べる制度があるか？」と聞かれたことがある。国際社会福祉情報の飯田さんの報告によると、「日本語を学ぶ公的な政策はない」らしい。

ミラマーカレッジの事務所でテストを受けた帰り道、一人の女性に話しかけられたことを思い出した。年齢は 50 代くらいの背の小さなおっぱ頭の女性だった。「あなた、勉強？」と言いながらニコニコと教室を指射していた。「あなたもこの学生ですか？」と聞くと、「私、勉強。」とまたニコニコ。単語一言の返答しか返ってこなかったのが、あまり話は出来なかったが、レベル 1 のクラスで学んでいるベトナムから来た女性だった。私が日本から来たと伝えると、「ニャ、ニャ、ジャパン、ニャ、ベトナム。」と教えてくれた。ベトナム語で日本はニャと言うらしい。

名前も知らない、一度しか会っていない人だけれど、英語が話せないにもかかわらずアメリカに渡り、あの年齢で一から学んでいる姿に、私はずいぶん勇気づけられた。私に日本の移民政策状況を尋ねたアジア人の友人は日本語を全く知らない。もし彼女が日本に来たら、きっとあのベトナム人女性と同じように一から日本語を学ばなければならない状況になるのだろうと思った。しかし、日本には日本語を学ぶ公的な政策が無い。残念ながら気安く「日本においてよ」とは言えないなと思った。



ESL で通ったメサカレッジの生涯学習用校舎。

## 2. アメリカ人とは？

アメリカに行ってから、日々のあれこれを SNS に書き散らしたり写真を載せたりしていた。それを見た友人知人から時折メールをもらう事があった。メールの中には「アメリカ人はどんな感じですか？」といった内容の質問が書かれているものが度々あった。初めのうちは「オープンだよ。」とか「フレンドリーだよ。」などと返事していたのだが、よく考えてみると『アメリカ人』とは誰の事を指すのだろうか？という疑問が湧いた。私も含めてアメリカに住んでいる人が必ずしもアメリカ国籍だとは限らない。そしてアメリカ国籍を持っている人たちの中にも、つい先月までは別の国の国籍でしたというような人は決してめずらしくはないのだ。事実コミュニティーカレッジの語学コースのクラスメートは、全員外国籍のアメリカ在住者だったし、ケアアシスタントコースのクラスメートも、半数はアメリカ国籍を持っていなかった。

移民によって出来た新しい国なので、アメリカ人だから見た目が必ずしも西洋風という事も無ければ、アメリカ人だから必ず

しもネイティブの発音というわけでも無い。なので、誰がアメリカ人で誰がアメリカ人でないかを見分けるのは極めて難しい、というかほぼ不可能だ。

先月まで別の国籍でしたという人に会った例としてこんな出来事があった。アメリカ式のバスタブは日本式のバスタブとは異なり、お湯をためてつかる事は出来ない。その代わりマンションには敷地内に共用の屋外スパ（湯船）が用意されていて、水着で入るというスタイルだった。屋外スパはマンション住民の一種の出会いの場、交流の場のような機能もになっていた。英語があまり得意でない私は、話の輪に入られると、その間ずっと頭を高速回転させていなければならないので、いつも本を持って行って読んでいるふりをして話しかけられるのを避けていた。が、たまたま手ぶらで行った日に白人男性から話しかけられた。ロサンゼルスから友だちの家に遊びに来たのだという男性だった。聞き取りは大体出来るようになったと思っていた矢先だったのだが、その日はなかなか聞き取れず、何度も何度も聞き返した。あまりに頻繁に聞き返すのを申し訳なく思い、「ごめんなさいね。私、日本人だから、英語が下手で上手く聞き取れなくて。」と謝ると、「いや、君は悪くないよ。僕の発音が悪いんだ。」と言われた。「そんなことないよ。だって、あなたはネイティブだもの。私の英語力が低いんだよ。ごめんね。」と言うと、その男性はしばらくうつむいてスパのお湯をかき回しながら、「実はね、僕は先月アメリカ人になったんだ。それまではセルビア人だった。大学院を卒業して、ロサンゼルス会社にこの秋から就

職が決まったから、アメリカ国籍が取れたんだ。だから、僕はネイティブじゃないし、君が聞き取れないのは君のヒアリング力のせいじゃなくて、僕の発音が悪いせいだ。本当に君の英語は悪くないよ。」と言われた。あまりの話の展開に驚いたが、「おめでとう！就職が決まって、アメリカ国籍を取れたなんてすごいじゃない。」と言うと、「でも、家族でアメリカ国籍を持つてるのは僕だけなんだ。。。』と。

このように、アメリカ国籍を持っている人にも色々な人がいた。語学チューターをしてきていた大学生の内の一人は、両親共にメキシコから移住してきたメキシコ系 2 世だった。が、彼女の外見はメキシコ人というよりはヨーロッパ人に近かった。不思議に思ったので尋ねてみたところ、父方の祖母がスペイン人なのだという事だった。

マンションを紹介してくれたエレナはフィリピンから来た 1 世だということだった。が、見た目は極東アジア人で、中国語が堪能だった。「エレナはアメリカ人なんだよね？」と尋ねると「そうよ。」と笑顔で答える。「もしかして中国人？」と尋ねると「そうよ。」とまた笑顔で答える。「でもアメリカ人になる前はフィリピン人だったんだよね？」と尋ねると「そうよ。」と更に笑う。「私、混乱するわー。」と言うと、「私は、中華系アメリカ人なのよ。」と私の混乱具合を楽しむように更に笑っていた。

ヨガを教えてくれたクリスの外見は一見するとイタリア人っぽい。が、生まれはアメリカで、育ったのは何と南アフリカだと言う。そして、ご両親はアメリカ人とイラン人で、今はスイスにおられるらしい。このような感じで、国籍がアメリカであって

も、生まれや育ちは本当に様々で文化や価値観も地球規模な人達にたくさん出会った。

語学コースには、金髪碧眼のいかにも西洋人的風貌の先生も何人か居たが、建国されて日が浅い国なので当然の事と言うべきか、自分の祖先がいつからアメリカに居るのか分からないという先生は一人も居なかった。なぜこのような事が分かるかという、まさか私が一人一人に聞いて回ったわけではない。授業のディスカッションのトピックスとして「自分のルーツ」というトピックスの日があったのだ。先生の先祖は 1860 年代にイギリスからアメリカに渡って来たとのことで、アメリカ人にしては歴史ある家なのだと自信ありげに言っていた。その授業の日、ルーツについての一通りの説明を終えた後、先生が茶目つけのある顔をしながら、「日本人のルーツは面白いわよ。ゆかに聞いてみましょう。あなたの先祖はいつから日本に住んでるの？」と聞いた。「いつから？分かりません。何千年か前かな？」と答えると、クラスがざわめいた。「じゃあ、あなたが住んでいた京都にはいつから住んでるの？」と聞かれて「京都には 100 年くらい。」と答えると、「その前はどこにどれくらい住んでいたの？」と質問が続き、私がそれに答えると、クラスメートは口を開けてぼかんとした顔をしていた。「ね、日本人は面白いでしょ。歴史が長いからね。国によってルーツのあり方は全然違うから、後はグループの皆でディスカッションを楽しんで。」と言われた。この授業を通して、国によって国民の構成員やルーツが様々に異なるという当たり前の視点に出会う事が出来た。当たり前の視点だが、この視点はアメリカに来るまでの私に

とっては、当たり前視点ではなかった。

「アメリカ人とは誰を指すのか？」との問いに対する答えは、やはり今でもよく分からないし、「アメリカ国籍の人」以外の答えが見つからない。が、「アメリカ人はどんな感じですか？」との問いに対する答えは見つかったように思う。アメリカ人とはアメリカ国籍を持っている人だとすると、あまりにも多様な背景を持った人達が集まっているので、そんな問いをすることには意味は無いという事だ。



アメリカ人も外国人も一緒に。インターナショナルセンターのボランティアさん宅のお庭でのパーティー。